ようこそ異界茶屋ふぶき屋へ外伝雑談

不死者のナザリック

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この小説は本編である「ようこそ異界茶屋ふぶき屋へ」の執筆中の間の時間にサクッと書いたお話やボツになったお話を書いて行こうと思います。

今作品はキャラの会話がメインで説明は基本行いません。

なのでキャラの設定については本編をお読みくださいませ。

本作はホロライブの二次創作になります。

キャラ崩壊は多々すると思うのでご了承ください。

目次

第1話「雑談」――――1
第2話「ガチャ」――――6
第3話「チョコレート」――――18
第話「……鏡……影…」――――30
第4話　星の降る日に――――40
第5話「お昼寝」――――52
第6話「家でお花見」――――58
第7話「山川散策」――――67
第8話「猫又と雪のご令嬢」――――79
第9話「白獅と紫龍」――――89

第1話「雑談」

「第1話雑談」

　ここはこの世界とは違う異界のお茶屋……

「ねーナザー今日の雰囲気なんか変じゃないかにゃ？」

「そうだねー姫ちゃん、なんかいつもと違うねー」

「そりゃそうだよ、だって今回番外編だもん。」

「店主！番外編ってどういうことですか？」

「それがね、主さんが本編の執筆中に思いついたちょっとした話を書くんだって。」

「そうなんですか。」

「チッ　本編書いてる時にこんなんしょうもない番外編書くなんてなに考えてるんだか」

「オーナー、それはさすがに言い過ぎです。」

「そうだよ！黒ちゃんそんな言いかた無いよ。」

「ぁあ！　別に何言ったって良いだろ番外編なんだから！」

「まぁ、黒さんのことは置いたといてにゃあ。」

「おい、猫姫！」
「今回のこの話は何をするのかにゃ…にゃ！にゃ！にゃー痛いにゃあ！痛いにゃあー黒さん!!」
「人の話を無視しるんなって、何回いえばわかるんだよ　！　この猫が!!」
「黒ちゃん落ち着いて！」
「それで、ホントに何をするのですか？」
「今回は上のサブタイトルの通り雑談をしてだって。」
「雑談ですか？」
「うん、そうみたい。」
「はぁー、雑談するために呼ばれたのかよ！私達」
「確かに上のサブタイトルには雑談って書いてあるにゃ」
「雑談って言ってもですけど、何を話ましょうか？店主」
「うーん、どうしよっか…？」
「　雑談なら何言っても良いんだろ？なら主の悪口を言いたいだけ、うにゃあ！」
「もう、それはいいにゃあ、ほんとに何話そうかにゃフブキさん？」
「そうだねー……」
「そうだ！自己紹介しよう。」

「「自己紹介？」」
「なんで今さら自己紹介なんだよ。」
「だって私と黒ちゃんは知ってる人は多いだろうけど、ナザさんと猫姫ちゃんは知らない人が多いじゃない。」
「そりゃ、この作品のオリジナルキャラなんだからな。」
「だから私達も含めて改めて自己紹介しようって思って。」
「それ、良いですね店主♪」
「確かに面白そうにゃあ。」
「じゃあ私から行くね。」
「私は白上フブキって言います。ふぶき屋では店主をやっています。好きなことはゲームで好きな食べ物はお茶と、とうもろこしです。皆さん改めてよろしくお願いしますねー。」
「じゃあ、次黒ちゃんね。」
「はぁ？私もするのかよ！」
「みんなするの！」
「たく、わかったよ」
「名前は黒上フブキ、ふぶき屋ではオーナーをやってる。いちようふぶきの双子の妹だ。

好きなことはゲームで好きな食べ物はコーラと肉だ。」
「これでいいだろ？」
「オッケーだよ黒ちゃん♪」
「次！私が行くにゃあ。」
「猫姫って言うにゃあ、ふぶき屋では接客を担当してるにゃあ。好きなことはみんなとお話することと暖かいところでお昼寝する事にゃあ。好きな食べ物はお魚にゃあ。改めてよろしくにゃあ♪♪」
「最後、ナザにゃあ。」
「はい、わかりました。」
「名前はナザと言いますです。ふぶき屋では料理を担当してるです。好きなことは読書と料理です。好きな食べ物は油揚げと鳥肉です。皆様改めてよろしくお願いいたしますです。」
「これで一通り自己紹介できたね。」
「今回はこれで終わりか？」
「そうだねー」
「あれ、もう終わりなのかにゃ？」
「番外編だからね。」

「では、最後はみんなで挨拶しましょうです♪」
「それ、いいねー」
「みんなでやろうにゃあ♪♪」
「たく、仕方ない……」
「では皆さんここまで読んでいただき……」
「「「ありがとうございました」」です」にゃあ。」

第２話　「ガチャ」

第２話　「ガチャ」

ここはこの世界とは違う異界のお茶屋……

「さーてと、今週から私の好きなキャラのピックアップだから、引いていこーと♪」

「？」

「この日のために石もたくさん貯めておいたから」

「??」

「よーし、引いていこーもしかしたら最初の１０連で、出て来てくれるかも♪」

「???」

「えい！」ポチ

「???」

「確定演出こない……」

「まあ、まだ１０連だし、まだまだこれからだから」

「????」

数分後.

「うー…まだ３０連だから、まだジャブだから…」
「????」
さらに数分後
「もう半分…ピックアップどころか、☆４のキャラすら出てない…ううん大丈夫。大丈夫、まだ半分あるから」
「…？」
「あ、演出来た！　くるか、くるか」
「?!」
「あー！違う…もう持ってるー」
「……??」
さらに数十分後
「石なくなっちゃった……仕方ない補充しよう」ポチ　チャリン
「……???」
「よし、補充できたし続けよう。」
「……」

数十分後

「百連目」
「……」

「二百連目…」
「……」
「無くなったから二枚目だ！」

「三枚目……」
「……」

＊　＊　＊　＊　＊　　＊　＊　＊　　＊　＊

「五枚目……まだ、まだ回せる。」
「……」

＊＊＊＊＊＊＊

「なんで！こんなに引いて、でないんだよー」ジタバタ
「……あのー店主？」
「にゃ!?　ナザさん！　い、いつからそこに？」
「えーーと、店主が「ピックアップ？だから引いていこー」からですが。」
「最初からじゃないですかー　なんで声かけてくれなかったんですかー」
「すみませんです…えらく集中してたものなので」
「ところで、何をやってたのですか？」
「えーとね…これやってたんだー」スゥ

「携帯のゲームですか？」
「うん、そのガチャをやってたんだ。」
「ガチャ？　商店街にある回すやつのことですか？」
「う、うんそれはガチャガチャだけどそれみたいなものだよ。」
「そうなのですか、そのガチャ？で何があったのですか？」
「それが欲しいキャラがでないんだー」
「そうなんですか。」
「うん…だから仕方なくこのカードで……」
「フブキ！ここに居たのか！」ズズー
「あ！黒ちゃん」
「私もいるにゃあ。」ヒョッコリ
「あ！姫ちゃん」
「何やってるにゃ？」
「店主がガチャ？ってものをやってたから見てたんだ。」
「またやってんのかよ。」
「黒ちゃん、良いじゃん！別に好きなんだから！」
「どうせまた、課金しまくって爆死したんだろ！」

「そ、そ、そんなに課金してないし、それにまだ爆死って決まったわけじゃ……」
「じゃあ、床に転がってるカードはなんだよ？」
ギグ「え、えーーと、に、二千円札のカードだ、だよ、く、黒ちゃん……」アセアセ
「嘘つくな、どう見たって二万円って書いてあるだろ。」
「に、二万円？」
「まて、二万円のカードが五枚目もあるってことは……」
「十万も使ったのかにゃあ!?」
「べ、別に良いじゃん！使ったって!!」
「いくらなんでも使いすぎなんだよ!!!」
「そうだにゃ！十万稼ぐのにどれだけかかるとおってるにゃあ!!」
「一週間はかかりますね」
「むーー今日はこれで終わるつもりだったもん。」
「今日はって明日もするのかにゃあ？」
「もちろんだよ、姫猫ちゃん！一週間あるんだから出るまで引き続ける……」
「禁止」
「……え。」
「フブキ！お前はしばらく課金禁止!!」

「黒ちゃん!?」
「当たり前だ、このままじゃ金がなくなる。」
「黒さんの言うとおりにゃあ!このままだと家計が火の車にゃあ。」
「その前に出れば良いんだよ」
「不確定過ぎるんだよ！　猫姫！フブキの財布を取り上げろ！」
「わかったにゃあ。」
「あーー猫姫ちゃんやめて！」
「フブキさん、許してにゃあ　これはこれはフブキさんのためでもあるのにゃあ。」
「あ、私の財布！」
「財布は私が預かる。」
「ひどいよ黒ちゃん……」
「そういうことだ、返して欲しがったらしばらく課金は控えろ！」
「うーーどうしよう……」シュン

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

廊下にて……

「ねぇ姫ちゃん」スタスタ

「なんにゃ、ナザ?」スタスタ
「財布取り上げるなんてかわいそうだよ。」
「あれもフブキさんのためにゃあ、あの調子じゃあ私たちが生活できなくなっちゃうにゃあ。」
「それはそうだけど…楽しみを、奪うのはよくないよー」
「大丈夫にゃあ、ナザあういうゲームはガチャだけが楽しいだけのゲームじゃないにゃ。」
「そうなんだ……」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ナザと猫姫の自室にて
(でも店主、カ、キ、ンを禁止って言われてからすごい落ち込んでいるです。)
(なんとか元気付けられないかなです?)
(ん、そういえば店主に見せてもらった画面のキャラって私に、似てたような……↓
「そうだ!」
「どうしたのかにゃ、ナザそんな大声だして」
「ねぇ姫ちゃん、ねっとつうはんのやり方教えてくれない?」
「ナザ…それを言うならネット通販にゃあ、まあそれはともかく、いきなりどうしてにゃ

あ？」
「ちょっと買いたい物があってね♪」
「そう言うとなら教えるにゃあ。」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

カタカタカタ「これかなー、違う、これじゃない。あ！これだー」ポチ
「これで、店主喜んでくれるかな？」

数日後……
ピンポーン「宅急便でーす」
「はーい！　今いくです。」
「こちらになります。」
「ありがとうございますです♪」

「おい、何買ったんだ？」
「秘密です。オーナー♪」
「ナザー教えてくれたって良いじゃないかにゃー」

「姫ちゃんでもちょっとこれは秘密です。」
「むーー良いじゃないかにゃー」
「ダーメ」
「変な物買ったんじゃ無いだろうなー？」
「心配なくです♪」
「ところで店主は？」
「あぁ、フブキなら自室にこもってるよ」
「ありがとうございますです。では！」ピューー
「なんだったんだ一体？」
「ほんとにゃあ。」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「うーーなんとか血眼になって石集めたけどぜんぜん当たる気がしないよー」アワアワ
「店主ーいるですかー？」
「あーナザさん、いるよー」
「入って大丈夫ですか？」
「良いよーどうしたの珍しく……」
「どうでしょうか店主」ニコ

「……」放心中
「えっと…似合ってますか？」
「は！　ナ、ナ、ナ、ナザさん!?どうして私が欲しいキャラの格好してるの!?」
「はい♪店主に喜んでもらおうと、ねっと、で調べましたです。こういうのをコスプレ？っていうのですよね？」
「う、うん確かにコスプレって言うけどほんとになんで？」
「……この前、店主ガチャの課金、禁止されてしまったじゃないですか。」
「う、うん」
「そのあとからの店主、とても落ち込んでいたので少しでも元気になってほしくて……」
「ナザさん…ほんと気を使ってもらってありがとう。」ニコ
「店主に笑顔が戻ってくれて嬉しいです♪」
「ねーナザさん……」ウズウズ
「はい？なんで……」
「もう我慢できない！」バア
「きゃあ！」ドカ
「ハアハア……」
「な、なにするのですか、店主？　いきなり押し倒して…」

「ずっとでなかったけど、もう満足だって目の前にいるんだもん」ハアハア
「お、落ち着いてくださいです店主。」
「落ち着いてられないよ、だって目の前にいるんだもん欲しかったキャラが♪」ハアハア
ブンブン
「て、店主!?」
「ゲームで操作はできないけど、直接愛でることはできるもんねー」ハアハア　ブンブン
「ひぇ……」
「ナザさん…ちがう、今だけはこのキャラの名前で呼ばせて、そして……いっぱい愛でさせてーーーー」ブンブン
「え、えーーーーーーーーーーー」

第３話「チョコレート」

ここはこの世界とは違う異界のお茶屋……

ある日…ナザと猫姫の部屋

「ねぇ、姫ちゃん」

「なんにゃあナザ？」

「今日、雑誌で見たんだけどもうすぐ、ばれんたいんっていう人間様達のお祭りがあるんだよね？」

「お祭りって言うか…まあ、バレンタインは大切な人にチョコを送る日にゃあ」

「チョコレートですか？じゃあ、私たちもやっても良いの？」

「別に問題ないにゃあ♪ところで……誰に送るのにゃあ？」

「もちろん、店主とオーナーに決まってるじゃん♪」

「……まあ…予想どうりにゃあ」

「でも、どうしようチョコレートっていっても、いっぱい種類があるのですし」

「そうにゃね、フブキさんは何でも良さそうだけど、甘ければにゃあ、でも問題は黒さんにゃあ」

「オーナーって確か、甘い物、店主ほど好きじゃなかったよね？」
「フブキさんほどの甘党じゃないけど、嫌いではなかったはずにゃあ」
「うーん……二人が喜んでくれるチョコレート……どんなのだろう…」考え中
「確かに悩みどころにゃあ」考え中
「……うーん……」
「うーんにゃあ……」
「そうだ！」ポン
「なんか良いの思い付いたのかにゃあ？」
「うん♪　これなら、店主もオーナーも喜んでくれるよ♪」
「さっそく、材料買いに行こう」ガシ
「あ！ちょっと待つにゃあ！一体何を作るのか教えてにゃあ！」ズルズル
「行きながら話すから♪とりあえず市場へ全速前進！」バサッ！
「市場じゃあなくて商店街にゃあーー！しかもそんなセリフどこで覚えたのにゃあーーー！」抱えられながら

「……あれ？市場ってどっちだったっけ？」
「おいにぁあ！」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ほぼ同じ頃……白上と黒上の部屋

「黒ちゃん！もうすぐバレンタインだね」
「あぁそれがどうしたんだよ？」
「バレンタインだよ、黒ちゃん！大切な人にチョコを送る日だよ！」
「だからそれがどうしたって聞いてんだよ！好きな人でもできたのか？」
「そんなわけ無いじゃん！もちろんナザさんと猫姫ちゃんにだよ！」
「なんだよ…あいつらかよ」
「だから、一緒に作ろう黒ちゃん？」
「はぁ！どうして私まで作らなきゃいけないんだよ！」
「こういうのは二人でやるのが良いんだよ」
「理由になってねえよ！」
「……黒ちゃん、ナザさんや猫姫ちゃんのこと…好きじゃないの…」ジー
「ぐ……」
「大切な人に日頃の感謝を伝えるのもバレンタインだと思うよ？できたら
「ぐ、ぬぬ……確かに、ナザのやつには料理だったり、家事のことで世話になってるし、

猫姫も何だかんだで遊び相手になってくれたり……確かに大切な奴らだが……」
「じゃあ決まりだね、黒ちゃん」
「……仕方ない、私も手伝う」
「でもどうしよーどんなのが喜んでくれるかな?」
「普通に市販のチョコで良いんじゃないか?ナザなんてコンビニの板チョコでも喜びそうだし」
「さすがにもっと良いのあげようよ、やっぱりここは手作りなのがいいよ」
「私も言えないがフブキ、お前手作りチョコなんて作ったことあんのか?」
「もちろんないよ!」即答
「即答すんなよ!」
「じゃあ、二人で練習しようよ」
「私もかよ!」
「ほら、そういうとことだからさっそく材料買いに行くよ!」グイグイ
「あ!ちょっとフブキ!引っ張るな!!」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

バレンタイン前日
店の台所

「さぁ姫ちゃん！頑張って作ってこう！」
「まさか……カカオ豆から買ってくるとは思わなかったにゃあ……」
「だってこの方が細かい調節ができるからね♪」
「ほんとにナザの料理へのこだわりは感服するにゃあ」
「じゃあ作ってこう、私がカカオ豆の殻とばく芽を抜くから、姫ちゃんはすり鉢でカカオ豆をすりつぶして」
「そういうのなら任せるにゃあ」

・　・　・　・

「よし、これぐらいでどうかにゃあ？」
「うん、これくらいで大丈夫だよ　ここから砂糖とミルク入れていくから混ぜて」
「了解にゃあ」クルクル
「どうかにゃあ？」
「いいよ、ここからこのすり鉢を４５度のお湯に入れて、バターいれるからさらにかき混

ぜて」
「ふんっにゅ！固くなってきたにゃあ」
「姫ちゃん頑張って、なめらかになるまでかき混ぜて、あとときどき確認のために舐めてみて」カチャカチャ
「ナザは何を作ってるのにゃあ？」グリグリ
「チョコレートにかける抹茶ソースを作ってるんだよ」カチャカチャ
「抹茶ソースにゃあ？」
「うん、店主特製のお茶葉と砂糖をしっかりすりつぶして、牛乳をちょっとずつ加えて作るんだ」
「想像しただけでも美味しそうにゃあ」
「これなら店主やオーナー喜んでくれるよね？」
「絶対喜んでくれるにゃあ」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

同日、家の台所
「黒ちゃん！電子レンジじゃあ焦げちゃうよ！ちゃんとお湯で溶かさないと！」
「うるさい！ちまちまお湯で溶かしてられるか！こっちの方が早い！」ジタバタ

「ちゃんと本通り作らないと美味しくできないよ！」
「あーーも、わかったよお湯で溶かせば良いんだろ」
「じゃあ、黒ちゃんはチョコを溶かしててね、私はクッキーの生地を作ってるから」
「えっと……ボウルにバターと黄身を入れてかき混ぜていくと……」クルクル
「なあフブキこれどれくらい溶かせば良いんだ？」
「ちょっと待って今生地作ってるから」
「手が離せないなら私に貸せ」
「あ！待って黒ちゃん！ボウルから手離したらダメ！」
「は？」プカ
「あー黒ちゃん！ボウルにお湯がー」
「くそ！急いでお湯出さねえと」
「こんな調子でちゃんと作れるかな……」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

バレンタイン当日
「店主ーオーナーちょっと来てもらって良いですかー？」
「どうしたのナザさん？」
「なんか用か？」

「いいから来て下さいです♪」
（黒ちゃん、ちゃんとラッピング終わった？）小声
（そっちこそちゃんと終わったのかよ）小声
（もちろん……でもこんなので喜んでくれるかな……）

お店の席にて
「店主、オーナー今日は何の日かご存知ですか？」
「知ってるよ、今日はバレンタインでしょ」
「正解にゃあ」
「そんなん知ってて当たり前だろ」
「はい、なので……」コト
「これを作ったのにゃあ♪」コト
「んな!?」
「なにこれ…」
「バレンタインのチョコレートなのです♪♪」
「これ…作ったの？ナザさん、猫姫ちゃん!?」
「そうだにゃあ」

「はい」
「すごいなこりゃ……」
「ナザがチョコから作りたいっていうから、カカオ豆から作ったにゃあ」
「え！カカオ豆から作ったの！」
「はい、その方が二人とも喜んでいただけると思いまして♪」
（うーこんなの見ちゃったら出しづらいよー）シュン
（出しづれー）
「どうしたのですか店主？暗い顔をして」
「あ、あのね…ナザさん、猫姫ちゃん、二人に私達でバレンタインのチョコクッキーを作ったんだけど受け取ってくれる？」
「……」
「……」
「え、えっとー」ソワソワ
「マジかにゃあ!?」
「本当ですか!?店主、オーナー!?」
「う、うん、こんなのできだけどあげるね」
「いえ、いただけるだけでもう嬉しいのです」キラキラ

「そんなに嬉しいもんか？」
「当たり前にゃあ、フブキさんや黒さんが作ってくれたものを喜ばないはずがないにゃあ」
「そんなにいってもらうとそれだけで照れちゃうよ」
「店主、食べても良いですか？」
「うん、良いよでも、ボロボロだけど大丈夫？」
「むしゃむしゃ」
「むしゃむしゃ」
「どう？」
「うまいか？」
「「おいしいです」にゃあ」
「そ、そうなの、こんなにボロボロのクッキーなのに？」
「おいしいのはおいしいのにゃあ、しかもフブキさんや黒さんが作ってくれたのなんて美味しくないはずがないのにゃあ」
「え、でもこんなクッキーだよ……」
「店主、オーナー……」
「なんだ？」

「な、なにナザさん？」
「料理というのは別にただ味が美味しいだの見た目がきれいだのではないのです…重要なのは作ることへの思いなのです♪このクッキーには店主達が私達のことを思って作ってくれたのだということが伝わってくるのです」
「ナザさん……」
「……」
「だから…そんな暗い顔をしないでくださいです♪」
「そうだね、ごめんねこんなおめでたい日なのに二人とも暗い気持ちしちゃって」
「そんなことないにゃあ、フブキさんと黒さんが喜んでくれるだけで私達は嬉しいのにゃあ」
「ささ、固くなる前に私達が作ったチョコレート食べてくださいです♪」
「そうだね、じゃあいただきます」
「モグモグ」
「モグモグ」
「どうですか？」
「美味しいよ二人供！」
「甘いのあんまり好きじゃないがこの抹茶ソースが抑えてくれて食べやすいな」

「やったにゃあ♪ナザ！」
「そうだね♪姫ちゃん♪」
「それに何より……」
「？」
「？」
「二人の気持ちがいっぱい伝わってくるよ！」

第話「……鏡……影…」

ーここは……どこ？ー

ーまるで…鏡の迷路みたい……ー

「ウフフフ……」

ー誰ですー

「ひどいわね……自分の顔も忘れたの」

ーえ……あなたは…私……

「ウフフフ……ねぇ……なんであなたは…あんな子達の下で働いてるの？……」

ー何が言いたいのです……ー

「……忘れたの……あなたが…何を…したのか……」

――……

「自分があの…戦争で……何を受け……何をしたのか……」

――……――

「贖罪のつもり……それで…あなたがやってきたことの」

――……――

「そんな程度じゃあなたの罪はきえないわ……」

――……うるさい！――

ガシャン！

「ハァ…ハァ……」

ーウフフフ…無駄よ……ー

「え…」

ー私は影…光があれば必ず影が生まれる…ー

「……あなたは誰……」

ーあなたが私であるように私はあなた……私は私の影……鏡の向こうの存在……ー

「！……」

ーウフフフ……またいつか……会いましょう♪……もう一人の私……ー

「う……意識が……」

ーその時には……

答えを教えてね……

ウフフフ……ー

＊＊＊＊＊＊＊＊

「お……る…に…あ」

（う…うーん）

「起きるにゃあ！ナザ!!」

「うわ！」

「やっと起きたにゃあ」

「姫ちゃん？」

「珍しいにゃね、私が起きるまで寝てるなんて、なんかうなされてたみたいだけど大丈夫にゃあ？」

「うん……大丈夫だよ…うん……」
「本当かにゃ？体調悪いなら無理しなくてもいいにゃあ」
「大丈夫だから…ほら、店主やオーナーが起きて来る前に準備しよう♪」
「大丈夫ならいいけどにゃあ、でもナザ」
「何？姫ちゃん？」
「何か悩んでるならちゃんと言ってくれにゃあ、私でいいなら何だって聞いてあげるにゃあ」
「……ありがとう…姫ちゃん、じゃあ何かあったら遠慮なく、言うね♪」
「そうしてほしいにゃあ♪」
「ほら、急いで準備しよう♪」
「はーいにゃあ」

（なんで……あんな夢見たんだろう……そっか……今日はあの日だからか……）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ナザの記憶……

お母様…お父様……どこ……

ナザこっちよ急いで……

ハァ、ハァ

あなた……どうして…

今は逃げるんだ…とにかく。

いたぞ！逃がすな！

しまった……お前はナザを連れて逃げるんだ！早く！

でも…あなた！
ここは俺がなんとかするからさあ！
お父様ーー！
ナザ……お前は……強くいき…
ハァ…ハァ……
お母様……！
私には構わず逃げて！
でも…良いから！
あなたは、私達よりもずっと強い……だからか……
……　生きて……
復讐しよう!!やつらに！……

そうだ！やつらには神ではなく、我ら自身で裁きを与えるのだ！

……

掟に背き、反対の者はいないな？

賛成！

当たり前だ!!

やつらに裁きを!!

殲滅は我らの掟だ!!!

……

やめて……

…助けて……

嫌…

……

お願い……します…娘達だけは……この子達だけは見逃してください……

……

おい！なぜ貴様は敵を助けている!!

…うるさい……

ウフフフ……思い出した……あなたが何を受け……何をしてきたか……

第４話　星の降る日に

ここはこの世界とは違う異界のお茶屋さん……

とある日の夜……

「今日はお星さまが綺麗になのです」

彼女はお店の外用の長椅子に座りながら星を眺めていた。

今日は営業日であるものの、三人は、急な用事が入ってしまったため今日は一人で店番をしていた。

「それにしても今日はお客様が来なかったのです……私一人だったから良かったといえば良かったのですが…」

星を見上げながら呟いたが

それでも、誰もいないと言うのはやはり寂しい

と心の中では思ってしまい視線を地面に向ける

……あの人とあった日もこんな夜でしたっけ…

思考を過去に向ける

行くあてもなく、ただ放浪していた自分を温かく迎えてくれた日のことを……
その人のために…その恩を返すために……その笑顔を守るために……

いけない、いけない…今はこんな感傷に浸ってる場合じゃない
首を横に振りつつ思考を今に戻す。頭の中の話題を変えようとふと壁掛け時計を見ると、もうすぐ閉店の時間になろうとしていた。
「もうこんな時間ですか」
そろそろ閉店時間だから片付けを始めようと、ベンチから立ち上がり店の中に入ろうとする。
すると……
「すみません!」
後ろから声をかけられた
声に反応して後ろを振り向くとそこにはベレー帽をかぶり、サングラスをかけた人物がたっていた
内心身構いた表情や動きでは見せないものの、普段見慣れないお客さんでしかもこんな暗がりであったためである。
「お茶屋さんってここであってます?」

ベレー帽の人物はそう口を開いた。
女性の声であった。
警戒を解いた、今さっき後ろから声をかけた人物はこの人で間違いない
「はい、そうですよ」
笑顔で答えた、その笑みは今日初めてのお客様であったためか、いつもより笑っていた
「あーー良かったーここであっててー」
ベレー帽の人物は肩の力が抜けた用にガクッとするとすぐに顔をこちらに向けた。
暗がりでベレー帽とサングラスで顔の大半をおおっているものの、安堵の表情があるとわかった。
「こんな真っ暗だけどまだ開いてます？」
「はい♪まだ大丈夫ですよー」
そういうとベレー帽のお客様を店内へ案内した。
「カウンター席とテーブル席のどちらがよろしいでしょうか？」
「んーーとじゃあカウンター席で」
「かしこまりましたです♪ではこちらへどうぞです」
はカウンター席へ案内した。

ベレー帽のお客様はカウンター席に座ると身に付けていたベレー帽とサングラスを取ったベレー帽とサングラスのせいでわからなかったがその女性は青色の髪をしていた。

「お茶ですどうぞなのです」

お茶碗にお茶を注ぎ青髪のお客様へ出す。

「ありがとう、じゃあさっそく……」

そう言っては青髪のお客様はお茶を一口飲んだ

「なにこれ！美味しい!!こんなに美味しいお茶初めて飲んだよ!!」

青髪のお客様は目をキラキラと輝かせながらそう言った。

「そう言ってもらえると嬉しい限りなのです。おかわりが必要であればいつでも言ってくださいませなのです」

嬉しそうに答えた。

「え!?おかわりして良いの!?」

「はい♪いくらでもして構いませんです♪」

「えー!?こんな美味しいお茶なら何杯でも飲めるよ」

青髪のお客様はさらに目を輝かせて言った。

「こちらがお茶菓子のメニューになりますです♪よろしかったらどうぞーなのです」
お茶を注ぎつつメニューについても説明した。
「へーこんなにあるんだー……じゃあこれ！お団子二皿お願い」
青髪のお客様はメニューを指差しながら言った
「かしこまりましたです♪すぐにお持ちいたします」
台所へ戻り食器棚からお皿を二つ取り出すと近くの木箱からお団を出してお皿に乗っける。
「どうぞーなのです♪♪」
お団子をお客様のカウンターに置き、台所に戻ろうとすると
「ちょっと待って！」
とお客様に止められた
「はい、なんでしょうか？」
「これ！店員さん用に頼んだやつだから一緒に食べましょう♪」
「え!?」
初めてそう言われたために目を見張って驚いてしまった
「お客様のものなんていただけませんよ」
「そのお客様が食べて良いっていってるんだからほらほら」

そんな攻防戦が続くこと数分……

ついに観念して座っていただいてしまっていた。

「うぅぅぅぅんーこのお団子も美味しい！お茶に凄い合うよ」

横ではお団子を美味しそうに頬張りながらお茶を飲む青髪のお客様がいた。

「この、お団子とかお茶も手作りなの？」

「はいそうですよーお茶の葉等の材料は市場から買ってくるのですが、ブレンドや料理は私達でやってるのです♪」

「へーー凄い！こんな美味しいのを手作りなんて」

「喜んでいただけて何よりなのです♪♪」

「そういえばこのお店って、店員さん一人でやってるの？」

「違いますよーいつもは三人でやってるんですが急な用事がありましてお店を閉めるわけにはいかなかったので私が残って店番をしていたのです」

「へーそうだったんだ…ごめんねそんな日に来ちゃって

」

「いえいえ、構わないのです♪　」

笑顔で返した

「お客様は何をやってらっしゃるのですか？」

「私はねー歌を歌ったり、ゲームをやったり、いろいろなことをしているよ」
「そうなのですか」
「店員さんはゲームとかしないの？」
「私ですか？私はあまりゲームはしないのです、最近好きな小説家様がいてその方の作品を追っかけてるのです」
　目をキラキラさせながら語る彼女を青髪のお客様はクスクスと笑った
「えーと……すみません変な趣味ですかね？」
「ううん、そんな事ないよ」
　～そんな会話をしていること数十分～
「あ！もうこんな時間じゃん！そろそろ帰らないと」
　時計を確認するとすでに閉店時間を過ぎていた
「ごめんねー店員さんこんな時間まで話に付き合わせちゃって」
「いえいえ構わないのです♪こちらこそお団子をいただき、楽しいお話までさせてもらったのですから」
「うんうんお礼を言うのは私の方だよ！美味しいお茶にお団子に何より……
「？」
　こんな楽しい店員さんとお話がでしたんだもん」

「……そう言っていただけるとほんとに嬉しいのです♪♪」
　お会計を終え、青髪のお客様をお店の入り口まで送る
「今日はご来店ありがとうございましたです♪」
「こちらこそありがとう、ほんとにここは落ち着くお店だよお友だちの天使の子に聞いて来てみれば教えてもらった以上だったよ」
「そう思っていただけるならほんとに光栄なのです……ところで」
「どうしたの？」
「帰り道は大丈夫ですか？」
　すでに道は真っ暗であり、いなかであるため街頭もほとんどない状況である。
「大丈夫だよこれくらい、私こう見えても結構強いから」
「いえ、やはり今の時間はさすがに危ないのです。私が近くまで送っていくのです！」
「え!?送ってくれるの？」
「はい♪お団子をいただいたお礼なのです♪♪」
「でもどうやってついてきてくれるの？」
「違いますよー　飛んでいきますです♪」
「飛ぶ!?!?!?」
　過ごし下がっててくださいと青髪のお客様に言うと

全身に力を込める。
すると……背中が盛り上がり一対の翼が現れる、手を地面につけると「う…うぅー」とうめき声を洩らしつつ皮膚にはだんだんと鱗が現れていき顔の形もだんだんと変化していき体も大きくなっていく
「えーー!?店員さんドラゴンだったのー!!」
「はい!!そうです!あまりこの姿にはならないのですが」
「ずっとトカゲだと思っていたよ」
「龍じゃい!!なのです!!!」
誰かに似たことを言うと青髪のお客様を背中に乗せて飛び立った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

上空
「うっひょーーこりゃ凄いや」
「風など大丈夫ですか?」
「大丈夫だよーむしろ大興奮だよ!!ドラゴンに乗って空を飛ぶなんて最近みんなとやってる恐竜のゲームみたいだよ!」
「楽しんでもらえてるなら良かったのです♪」
「ほんとこんなのみんなに自慢できるよ」

「あの……さすがにそれ目的でこられるのは困るのでこの事は秘密にしてもらえませんか？」
「えーーどうしよっかなー」
「そこをなんとかなのです!!」
「じゃあ、また乗せてくれたら黙っててもいいよ♪」
「……わかりましたです♪」
「あ、あそこ！私の家の近くだからあの辺に下ろして」
「かしこまりました」
　青髪のお客様がさした空き地に降り立ちお客様を下ろすと人間の姿に戻った
「さっきも言ったけど今回はありがとう」
「いえ♪お客様を全力でもてなすのが私の主義なのです♪」
「さっきの約束もあるしまたお店におじゃまさせてもらうね♪今度はちゃんと明るい時にでも」
「はい！いつでもお待ちしておりますなのです♪♪」
「それじゃあ、またねー」
　そう言って青髪のお客様は手を振りながら帰路について行くのを見て背中に翼を出すと自身も帰路についた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

お店への帰り空を飛びながら星を見ていた……
雲が一切ない空、満天の星空が空に輝いていた
遠い昔、母親から聞いた星の海の話を思い出す
ふと視線を地上に戻すと地上にも満天の星空があった
「え!?」
下にも星!?
私はほんとに星の海来てしまったのか、目をこすってもう一度確認すると建物や街頭の光であった
地上の光は空とは違うものの色とりどりに輝いていた
「空のお星様が星の海でしたら地上の夜景はまるで星の街ですね」
そう呟きながら二つの星を眺めていると二つの星の間を流れるひときわ輝く星があった
「あれは……流れ星ですかね……いやあの輝きようは……
そしてあの青色は……彗星」

二つの間を流れる彗星を見ながらふと今日来てくださった青髪のお客様の顔を思い出す。

あのお客様もあの彗星のような髪の色でしたね……

「あの人も見てるのでしょうか……星の街で…星の海を流れるあの彗星を……」

ナザはしばらくの間その場にとどまり二つの星空とその間を流れる彗星をいつまでも眺めていた。

第５話　「お昼寝」

ここはこの世界とは違う異界のお茶屋……

ある日の休日

「ふぁーお昼ごはんも食べたし何をしようかにゃあー」テクテク

「あ！ナザー」

「あ、姫ちゃんどうしたの？」パンパン

「何をやってるにゃあ？」

「今日は天気も良いからお布団を干してるんだよ」

「そうなのかにゃー……！」ピコーン

「？」

「ナザ！私も手伝うにゃあ」

「手伝ってくれるの？」

「そうにゃあ！手伝うにゃー」

「ありがとう♪じゃあ干し終わったお布団を縁側に置いていってくれない？」

「そういう仕事なら任せるにゃあ♪」

＊＊＊＊＊＊数十分後＊＊＊＊＊＊＊

「♪～♪ー」パタパタ
「うんしょ、うんしょ、」
「姫ちゃん、大丈夫ー」
「ダイジョブにゃあこれくらい！お布団はここに置けば良いのにゃあ？」
「そうだよーあとこれだけだからちょっと待ってて」
「……」
「あれ姫ちゃん？」
「スウスウ……」縁側のお布団の上
「あー！姫ちゃんそこで寝ちゃあダメだよせっかく干したんだからー」ユサユサ
「うにゃあ…こんなぽかぽかした日にお布団があれば誰だって寝たくなっちゃうにゃあ」
「うもーー」
「ナザも干し終わったのだから一緒に寝ようにゃあ」
　えいにゃあ！
　ドーーン
「きゃあ！」ドサ

「これでどうにゃあ！」上からのし掛かってギュウ
「姫ちゃんー離してよー」じたばた
「こうでもしないとナザ寝てくれないのにゃあ」ギュウ
「わかったから姫ちゃん！そんなに強くギュウしないでーもう抵抗しないからー！」

二人で寝っ転がってうとうと、としている
「ねーナザーもしも何もする事がなくてこんなぽかぽかとした日だったら何をするにゃあー？」
「うーーん……やっぱり読書かなーこんな日は縁側で本を読むのにぴったりだし」
「やっぱり読書かにゃあーいつも思うけど、読書以外何かしないのかにゃあ？」
「読書以外って言っても最近読めてない璃空埜様の新刊もあるからなかなか読書以外のことができないんだよねーそういうと姫ちゃんはこういう日は何をするの？」
「私はもちろんこうやってごろごろしたりお昼寝するにゃあー」
「姫ちゃんらしいね」
「ナザもナザらしいにゃあー」

「お前ら何やってんだ？」

「うにゃあ!?黒さんじゃないかにゃあ!?」
「オーナーどうしたのですか?」
「あぁ…たまたま通りかかったらお前らがここでなんかやってたのが目に入っただけだ何やってんだ一体」
「皆様のお布団を干してたんですよー」
「布団干してんだったら何で布団の上に乗っかって横になってんだよ」
「こんなにぽかぽかしてるとお昼寝したくなるのにゃあー」
「確かに今日は暖かいが……って猫姫!お前私の布団の上に乗っかってんな!」
「あーこれ黒さんのお布団だったのかにゃあ?」
「かなりシワだらけですね」
「猫姫ーーー!!」
「わーー黒さん落ち着けにゃあ」
「オーナー落ち着いてくだ……?」
「あぁ!ナザなんなん

「えーい♪」ドーン
「にゃああ!?」バタ

「猫姫ちゃん！黒ちゃんをギュウしちゃって」
「フブキさん、了解にゃあ」ギュウ
「あ！ちょと猫姫！」
「私はこっちをっと」ギュウ
「うにゃあ!?て、店主!?」
「うーーん干したてのお布団を最高たねー」
「フブキ…お前……」
「良いじゃん黒ちゃん一緒にお昼寝しようよ♪」
「ふぁーー黒さん暖かいかいから眠くなるにゃー」
「猫姫!?」
「スウ……スウ……」
「もう寝てるし！」
「クゥクゥ……スヤスヤ」
「店主も寝てしまいましたね」
「全く……」
「たまには良いじゃないですか休日ですし」
「たく……仕方ないな……フフたまには良いか」

「そうですねおやすみなさいなのですオーナー♪」

「おやすみナザ」

第６話　「家でお花見」

第５話　「家でお花見」

ここはこの世界とは違う異界のお茶屋……

例のあれにより営業自粛中のふぶき屋

「あーフブキさん、暇にゃあ～～」ゴロゴロ

「暇だね～猫姫ちゃ～ん」ゴロゴロ

「……」カタカタカタ

「こんな日が続くとなーんもやる気が起きないにゃ～」ゴロゴロ

「そうだね～」ゴロゴロ

「……」カタカタカタ　イライラ

でっピューン……

「あーーー!!おまえら気が散るんだよさっきから!!」

「えーー擦り付けにゃあ～今のミスは黒さんのミスにゃあ～」

「なんだとー!!」

「そーだよー今のは黒ちゃんのだよー」

「フブキまでー!!」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ただいま戻りましたです♪♪」

「あ！ナザお帰りにゃあ～」ピコピコ

「洗濯物ありがとーナザさん♪」ピコピコ

「あのーところでなぜオーナーはすみで丸くなってるのです？」

「……プイ」垂れ耳、涙目

「黒さん、私達に負けてすねちゃったのにゃあ」

「そ、そうなのですか……」ヒラ

「ナザさんこれは？服のすそから落ちてたけど」

「？桜の花びらですね♪♪」

「桜にゃあ？」

「うん♪庭にある桜がきれいに咲いてたよ♪♪」

「はぁーそんなに桜が咲いてるならお花見したいにゃあ……」

「でも今は外出しちゃ行けないんだよ」

「むーーわかってるにゃー」

「あ！そうだ！じゃあピクニックしよう！」

「ですが店主、外出はダメですよ」
「わかってるって、だから庭の桜の下でご飯食べよう♪」
「それ良いにゃあーフブキさん！私は賛成にゃあ」
「確かにそれならば外出自粛に引っ掛かってませんね♪♪」
「それじゃあ！決まりにゃあ！」
「わかりましたです♪♪料理は用意してきますです♪♪」
「ほら、黒ちゃん!!いつまでも拗ねてないで準備手伝って！」
「……プイ…私はいい……」
「黒さん私が悪かったにゃあーだから機嫌直してにゃあーー」
「……プイ」
「あのーオーナー？」
「……何？」
「オーナーの好きな料理作りますが何が良いですか？」
「!?……肉……」少し元気取り戻しながら
「かしこまりましたなのです♪♪」
「じゃあナザさん料理お願いね」
「はい♪かしこまりましたです♪♪」

「私もナザを手伝うにゃあー」
「うん♪わかったよーじゃあ黒ちゃんは私と物置から地面に座るためのブルーシートとってくるねー」
「……」
「ほら！黒ちゃん行こ!!」グイッ
「あーーわかったから引っ張るなー」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ふぶき屋物置

ギーー
「うわーここあけるのも久しぶりだなー」
「すごい埃っぽいな」
「そうだね～長くいると体に悪いからすぐに探そー」
ガサガサ
ガサガサ
ガサガサ
「チッ使わない魔導書とかお札とかガラクタしかないんだが、ほんとにあんのかー」
「うーん、ここにしまったはずなんだよなー……」

ガサガサ
ガサガサ
ガサガサ
ガサガサ
「お、あったぞフブキ！」
「そーなんだー」
「？何みてんだ……」
「えへへ良いもの見つけたんだー」
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
台所
ジューー
「♪♪♪♪」
「ナザーー冷蔵庫の食材無くなってきたにゃあー……」
「そうだね、また山菜拾いに行かないとね」
「ハァーいつまで続くんだかにゃあ～……」
「早く終わって欲しいねー」
「お肉なんて３日ぶりにゃあーここんところみんなで釣ってきた川魚だったから嬉しい

にゃあー」
「でも姫ちゃん、すごい喜んでたじゃん」
「むーーさすがに3日三食連続魚はさすがに飽きるのにゃあー」
「そうだね～私はわりとなれてるけど」さっさっ
「うーーん良い香りにゃあ♪♪」
「これをバスケットに詰めてっとこれで完成♪♪」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「黒ちゃんそっちのそっちのすみに杭刺してねー」
「はいはいわかってるよ」
「にしてもきれいだねー」
「たしかに毎年毎年きれいにさくもんだな」
「この木も私達と一緒に成長していってるねー」
「……そうだなー」

数分後

「フブキさーん黒さんー持ってきたにゃあー」

「姫ちゃーんこっちだよー」ブンブン
「わーー凄いにゃあー♪♪」
「ほんとに何度見てもきれいに咲いてますねー」
「ほら！見とれてないで食べよー」
「了解にゃあー♪♪」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「「「いっただきまーす」」」にゃあ」なのです♪♪」
「うーーん美味しいーこのサンドイッチ美味しいよー」
「久々のお肉にゃあー♪♪」
「……うまいな」
「ありがとうございますです♪♪」
「山菜も美味しいし、何より久しぶりにお肉食べたよー」
「最近魚ばかりでしたからね♪♪」
「またこの話かにゃー」
「猫なのに魚にケチつけんのかよ」
「だーかーらー三食３日連続は飽きるのにゃあー!!」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

にゃーーー！ガタガタこの。猫姫ー!!

「……」

「……どうしたのですか店主？そんなにボーッとして？」

「あ、ううん……早くみんなにあいたいなーって」

「店主のお友だちの皆様ですか？」

「最近会えなくてちょっと寂しくててね」

「店主のお友だちの皆様は面白い方々ばかりですからね♪♪」

「うん、だからみんなでこうやってお花見したいなーって」

「良いですね♪♪やりましょう♪♪」

「その時はみんなにナザさんや猫姫ちゃんのこと紹介するんだー」

「私の紹介なんて良いですよ店主」

「そんなことないよ、だってナザと猫姫ちゃんは

私の大切な家族なんだもん♪♪」

「……ありがとうございますです♪♪」

「だからみんなに紹介する時、恥ずかしがないでねナザさん♪♪」

「う、善処しますです……」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「よーーしみんなー物置で見つけたこの携帯型カラオケ機で歌うよー！」
「わぁーフブキさん歌が聞けるのかにゃあ!!」
「もちろんみんなにも歌ってもらうからね♪」
「げ！マジかよ」
「よーし勝負にゃーー!!」
♪～♪～～♪～～♪♪♪

（皆様ですか……すい様やかなた様、それに……
ビビちゃんやトワ様にまた会えるのですね♪♪♪）ニッコリ

こうして四人のお花見は夕暮れまで続くのだった……

第7話「山川散策」

第7話「山川散策」
ここはこの世界とは違う異界のお茶屋……
ふふき屋近くの山奥の川
「あ、引いてるのです!!」
「また、ナザの釣竿に当たりがきたのかにゃ……」
「それっ!」グイッ
ピチピチピチ……
「いい感じ大きさの山鮎だね、これはキープっと」バケツにポチャッ
「ハァーー……なんでナザばっかり釣れるのかにゃ〜」ヒュッ
「姫ちゃんは、そうやってすぐに釣竿引いちゃうから釣れないんだよ。もうちょっとじっとしないと。」
「それは、釣れてないのにこうやって、みょんみょん、と揺れるから紛らわしいのにゃ!!」
「それは、釣糸についてる重りとか水の流れでそうなるんだよ。魚が食い付くともっと

ぐってくるから、全然違うんだよ。」
「そんなこといわれてもにゃ～、一回も釣れて無いんだから、わかんないにゃ、そんな感覚」ポイッ
「根気強く待つことだよ、姫ちゃん♪♪そうすれば必ずくるよ」
「……ナザがそういうなら、頑張ってみるにゃ～」
　グイッ!!
「にゃ!!」
　グイグイ……
「引いてるにゃ!!当たりがきたにゃ」グイッ
　グイグイ……バチャバチャ……
「なんて引きにゃ、これは大物にゃ」
　バシャバシャ……グイッ
「にゃーー!!絶対につり上げたいけど……」ズルズル…
「このままじゃ、こっちが引きずりこまれちゃうにゃ」
　バシャバシャバシャ……ズルズル
　ま、まずいにゃ……
　ギュ!!

「にゃ!?」
「姫ちゃん!!大丈夫？」
「ナ、ナザ!?押さえてくれるのは嬉しいけど、このままじゃ、ナザも落ちちゃうにゃ!!」
「大丈夫…木にしっぽを巻き付けてるから。姫ちゃんもしっぽを私の体に巻き付けて」
「わ、わかったにゃあ」クルクル
「す、凄い引きだね」
「そうなのにゃよ、こはこの川の主に違いないにゃ!!」
バシャバシャバシャ!!……グイグイ……
「ぐ～～!!……ナザ、頑張って押さえてくれにゃ!!」ググググ……
「大丈夫……絶対放さないから……!!」
バシャバシャバシャ!!……グイグイグイグイ……
「火事場の馬鹿力にゃーーー!!!」グイッ!!!
バシャッ!!!
「キャア！」バタ
「にゃあ!!」バタ
ピチピチピチ……
「や、やったにゃ……つれたにゃーーー!!」

「やったね姫ちゃん♪♪」
「ナザが押さえていてくれたおかげにゃ♪♪」
「私はちょっと手伝っただけだよ、姫ちゃんが頑張って釣ったからだよ。」
「そんなこと無いにゃ、だから２人の成果にゃ!!」
「そうなの？」
「そうにゃ!!そういうことにしようにゃ!!」
「じゃあ、そういうことにしよっか」
「そうにゃ♪それにしても立派な魚にゃ」
「剣鮭っていう魚だね。」
「おーー私の好きな魚にゃ♪ナーザー早く食べようにゃ～」
「集合場所に帰ったらみんなで食べよう。店主達もそろそろ戻ってくる頃だろうし」
「わかったにゃ、そうと決まれば急いで戻ろうにゃ!!」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

山腹……
「あ！あったあった、黒ちゃーんあったよー」
「ゼェゼェ……フブキちょっと待って……」

「もーー黒ちゃん、もうつかれちゃったの?さっき休憩したばっかりじゃん。」
「フブキだってさっきまで疲れきってたじゃないかよ、なんでそんなに元気なんだよ?」
「あれぐらい休憩すれば誰だって元気になるよー、黒ちゃんは普段からゲームばっかりで動かなすぎなんだよ。」
「フブキだって私のこと言えないだろ、ここんところ一日中ソシャゲばっかりやってんじゃないか。」
「良いじゃん、こういうときなんだから一日中やってたって、それにいつも動いてたんだもん」
「あーわかったから!!動かない私が悪かったから!」
「わかったなら、山菜集めよう♪♪サボっちゃだめだよ」
ガサゴソ……ガサゴソ……
「フブキ、これは?」
「それはただの草だよ。」
「な!?違うのかこれ」
「うん、こういう柔らかめな葉っぱとかの草だよ」
「んーーわかった」
ガサゴソ……ガサゴソ……

「黒ちゃん、集まった～」
「これぐらいでどうだ？」
「うん、これくらいあれば十分だと思うよ。じゃあ、この山菜達をしょいかごにいれてっと。」
「で、下りはどっちが背負うこれ？」
「え！黒ちゃんが背負ってくれるんじゃないの？」
「はぁ!!なんで勝手に決めてんだよ。」
「えーだって私が山菜探して、黒ちゃんがしょい籠持ってくれるんじゃなかったの？」
「そんなこと、私は一言も言ったことないぞ!!」
「えー良いじゃん、ここまで持ってくれたんだからさ。」
「絶、対、に、やだ!!」
「じゃあ、ここは公平にじゃんけんで決めよう。これなら、恨みっこなしでしょ。」
「……わかったよ。」

＊＊＊＊数分後＊＊＊＊

「ほら、黒ちゃん早く～～おいてっちゃうよ～」
「以外と重いんだよこれ!!急かすんじゃねえよ!!」
「じゃんけんで負けたんだから文句言わないの～」

「くっそ……帰りの荷物持ちは絶対勝ってやる……」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ふぅ～やっと降りてこれた～」

「ゼェ……ゼェ……やっと川辺まで帰ってこれた。」

「頑張って黒ちゃん、ナザさんや猫姫ちゃん達との集合場所まであとちょっとだから。」

グイッ

「ちょっとフブキ、引っ張んなよ。ちょっとくらい休憩しようよ。ハァハァ……」

「あとちょっとだから♪♪」クンクン

「ふぁ～～黒ちゃん、いい匂いするよ♪♪」

クンクン「あ、ほんとだ……焼いた魚の匂いだ」

キュ～～～

「!?!?／／／／／」

「あれーー黒ちゃん、お腹減っちゃったの～」ジトー

「う、うるさい!!いいからとっとと行くぞ!!／／／」

「わかってるよー♪♪」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

川辺の四人の集合場所

「ナザー焚き火炎安定してきたにゃ～」
「はーい、ちょっと待っててね、山鮎を串に刺してっと」
「もう、その時点で美味しそうにゃ～」
「これを、火の近くに刺してとこれで焼き上がるのを待つだけだね。」
「美味しそうにゃ～そういえば、剣鮭はどこにゃ？」
「剣鮭はいまから切り身に捌こうとしていたところだよ」
「それは楽しみにゃ……って、あ!!フブキさんにゃ♪♪おーーい♪♪」
「あ！猫姫ちゃーん！、ナーザーさーん！ただいまー♪」
「お帰りなさいです、店主♪あれオーナーは？」
「黒ちゃんなら、もうすぐくるよ。」
「あ、いたにゃ」
「ゼェ……ゼェ……」
「オーナー大丈夫ですか？」
「つかれた～……」
「黒ちゃん、お疲れさま」
「お疲れ様です♪♪オーナー」
「お疲れ様にゃ～」

「お腹すいた～」
「そうですね♪お昼にしましょう♪♪」
「フブキさん、聞いてにゃ～♪♪私とナザでおっきい魚を釣ったのにゃ～」
「そうなの♪聞かせて聞かせて♪♪」
「それは食べながら話すにゃ～♪♪♪」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「「「いっただきまーす」」にゃ」です」
「んーー♪♪♪焼きたて美味しーー♪♪」
「うまいな」
「美味しいにゃ♪美味しいにゃ♪♪♪」
「やっぱり、直火はグリルとは全然ちがいますねー」
「しかも焼きたての剣鮭で飯ごうの炊きたてご飯なんて……もう幸せだよ♪♪」
「お焦げの部分は最高にゃ～」
「なぁ……前から気になってたことがあるんだかいい？」
「なーにー黒ちゃん？」
「商店街に買い物に行けなくなったのになんで私達の家って、ご飯とかパンはあるんだ

？」
「私も気になってましたです、どこから貰って来たのですか？」
「お米とパンはねーおにぎり屋さんとパン屋さんをやってるお友達がいてね、余ってるからって分けて貰ってるの」
　あーーあいつらからか、そういうことならつじつまが合うな」
「そうだったのかにゃ」もぐもぐ
「優しい方々ですね♪♪」
「うん♪だからこの騒ぎが終わったら、沢山お礼をしないとね♪」
「そうですね♪♪」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「「「ごちそうでしたー」」」にゃ」です」
「美味しかったにゃ～」
「うん、とっても美味しかったね」
「そろそろ帰りますか、店主？」
「んーー……せっかく来たんだから、もうちょっと遊んでから帰ろう♪♪」
「賛成にゃーー♪♪」

「遊ぶっったって、こんな山んなかでどう遊ぶんだよ？」
「んーー……」
「んーー……」
「そうだ」ポン
「？」
「？」
「？」
「今日、暑いから川遊びなんてどう？」
「賛成にゃフブキさん」
「いいですね」
「川遊びっていくらなんでもようちす……」
　バシャッ！
「にゃ!!」
「にゃふふふふ…どうにゃ、これで黒さんの石頭もちょっとは柔らかくなったにゃ♪♪」
「ね～こ～ひ～め～!!!!」
「悔しかったらこっちにこいにゃー♪♪」
「こんのーー!!」バシャバシャッ

「そんな攻撃当たらないにゃ～♪♪♪♪」
「!!!」
「黒!!ちゃん、あんなこと言ってたのに遊ぶ気満々じゃん」
「そうですね♪」
「私達も行こう♪♪」
「はいなのです♪♪」
バシャッバシャッ!!
にゃ!!ナザ、しっぽはずるいにゃ～
黒ちゃんえい！
にゃ!!フブキ!!!
バシャッバシャッ……

四人の声は夕方まで続くのでした……

第８話　「猫又と雪のご令嬢」

ここはこの世界とは違う異界のお茶屋……

ジリジリとした太陽の暑さが降り注ぐ商店街の大通り…

「あじぃ～にゃ～～……」

ふぶき屋の店員で猫又の少女、猫姫は虚ろな目で大通りを進んでいた

「いくら何でもこんな暑い日に書類忘れたから事務所に届けろなんてフブキさんひどくないかにゃ～」

黒さんは当たり前にゃけど外なんて出るはずないし～ナザは朝から出掛けてしまったから結局私が行く羽目ににゃってしまったにゃ～……

とわいえ届けた時フブキさんから今日は多めにお小遣いもらったしお昼食べて、当番だった買い出しもやっちゃおうにゃ～

そう思いながら私は商店街の大通りを進んだ

今日のお昼ご飯何食べようかにゃ～～こんなの暑いんだから冷たくてあと甘いのも食べたいにゃ～♪♪

美味しいお店がないか辺りを見回していると…

にゃ？

私は商店街の一角……丁度影になって少し薄暗くなっている所のベンチに座る女性に目が止まった

腰まである水色の髪と白い肌の綺麗な女性であったが何か様子が変だと思って近付いてみた時私は目を見張った

こんな暑い日だと言うのにその女性の上着はどう見ても冬物の服であった。そしてなぜか両手には髪と同じ色の壺を抱いていた

私が顔を覗くと白い顔はほんのりと赤く呼吸も少し荒かった

「もしもーしお姉さん、大丈夫かにゃ～」

優しくお姉さんの肩を揺らすもお姉さんの反応は「はぃ～……」とあいまいなものであった

こりゃ不味いにゃ！

呼吸の荒さとかこの顔の赤みがかり、それにこんな状態なのに汗も全然出て無いってことはどう考えても脱水状態にゃ早くどこか涼しい所に運ばにゃいとたいへんなことになるにゃ

周りを見渡しながら近場で涼しくお姉さんをいきなり運び込んでもへいきなお店はどこか考えた……

……あそこなら空いてるにゃ！

そう思った私は迷わずお姉さんを背負った

壺は置いて行こうとしたものの、壺が浮き出して中からちっちゃいシロクマのような生き物が顔を出した

「中身が入っていたのかにゃ」

壺の生き物はじっとこちらを見ていた

私達の言葉は喋れにゃいのかにゃ？だけどこっちの言葉は分かってるようだったにゃし

「このお姉さんを涼しい所に連れていくにゃ、自分で付いてこれるにゃら付いきてにゃ」

壺の生き物は頷いて私に近付いて私の真横に止まった

私はお姉さんの負担にならないよう日陰を移動しつつかつスピーディーに向かった

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「あの助けていただきありがとうございます」

喫茶店の置くの一番涼しいテーブル席、運び込んだお姉さんはお冷や入ったグラスを両手に持ってお礼を行った

「元気がすぐ出てくれて良かったにゃ」

私は笑顔で答えた

でもほんとに良かったにゃこの喫茶店が開いていてくれて
ここは洋風喫茶店「チェシャー」この町に住んでる猫族なら誰でもしってるお店にゃ、店員はマスター一人でこじんまりとしたお店だけどお店も綺麗だしマスターの作るパスタは絶品なのにゃ
時間的にも開店したばかりだったからお客さんも居なかったおかげで私が駆け込んだ時、マスターの猫族のお姉さんは事情を説明したら直ぐにこの席に案内してくれて良かったにゃ
「にしてもお姉さんはどうしてあんな所に居たのかにゃ？」
「この町最近引っ越して来たばかりでほとんどお店の場所など、どこへ行ったら良いのか分からなくて、そしたらこの暑さにやられてしまって」
お姉さんはグラスのお冷やを飲みながら答えた
「確かにこの町は入り組んでるから初めては迷うから仕方にゃいにゃ～」
「そうなのですか、私ずっと一面真っ白な雪に覆われた所から来たのでこの暑さや複雑な町並みになれなくて…」
「お姉さんは雪国出身なのかにゃ、だから夏なのにそんなに厚着なのかにゃ」
「はい、私の居た所は年中雪が積もっている所だったのでここの暑さが予想外過ぎました」

そんなん話をしているとお姉さんのお腹から「キュゥ…」と言う音がなった
「!?」
お姉さんは顔を真っ赤にしてお腹を押さえた
「お姉さんお腹空いてるのかにゃ?」
「えっ…その…はい……」
お姉さんは顔を真っ赤にしながら頷いた
「私もお腹ペコペコなのにゃ~マスター冷やしパスタお願いにゃ~♪♪」
カウンターの奥にいるマスターに声をかけるマスターは笑顔でこたえた
「お姉さんも何か頼むといいなゃ~♪♪」
「えっと…私も同じ物にします」
「分かったにゃ、マスターごめんにゃ~さっきの冷やしパスタもうひとつ追加でお願いするにゃ~」
私の注文を聞くとマスターは「かしこまりましたにゃっ」と頷き厨房へと姿を消した
「　料理が来るまでの間私が商店街とかこの町のこと教えてあげるにゃ~」
「良いんですか?」
「大丈夫にゃ~町の事とか教えないとまた倒れられてしまうと困るのにゃ~」
私がお姉さんにこの町のことを教えようとした時、大事な事をやってないことに気づ

いた
「あっしまったにゃ、そう言えばまだ自己紹介をしてなかったにゃ」
　私の言葉にお姉さんもハッとなっていた
「そうでした、すみません助けていただいたのに名前を名乗らないなんて」
「そこは別に良いのにゃ～私は猫姫、妖又　猫姫って言うのにゃ～♪♪お姉さんはなんていうのにゃ？」
「私は雪花　ラミィともうします、そしてこっちの壺に入ってるのは私のお供の精霊でだいふくと言います
　改めて妖又さん、私とだいふくを助けていただきありがとうございます」
「そんなにかしこまらなくていいにゃ～それに呼び方は猫姫で良いしさんずけもしなくていいにゃ～」
「えっ…そうなのですか…えっとでしたら…猫姫ちゃんありがとうございます」
「それでいいにゃ～この辺のこと教えてあげるにゃ～」
　そうして私はラミィさんとお互いのことも語りながら周辺のお店の事を話した
　マスターが料理を持ってきてくれた後は二人で冷やしパスタに舌鼓を打ちつつ食べてしばらく涼んだ後、お会計をして喫茶店を出た
「美味しかったにゃ～♪♪」

「そうですね、それにお昼ご飯までおごっていただきありがとうございます」
「別に良いのにゃそんなことぐらい、それでラミィさんはこれからどうするのかにゃ？」
「えっと私は自宅から戻る前に夕食の買い物をしようかと」
「同じにゃ良かったら一緒に行っても良いかにゃ？」
「ぜんぜん大丈夫ですよ、むしろどんな物を買ったら良いのか色々と教えてください」
「わかったにゃ～、商店街のおじさんやおばちゃんの攻略法を教えてあげるにゃ～」
「是非教えてください」
「よーし行くにゃ～」
そう言って二人は商店街の生鮮商品エリアへと足を運んで行った
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
「ふぅ～いっぱい買ったにゃ～」
両手いっぱいの商品を持ちながら私は言った今日は値切りもかなり上手くいった気がする
「猫姫ちゃんは沢山買うんですね、その食材を一人で食べてしまうのですか？」
「そんなわけないにゃこれは私達四人分のご飯にゃ」
「家族がいるんですか？」
「家族と言うか私はふぶき屋って言うお茶屋さんで住み込みで働いていて今日は買い出

しの当番だったのにゃそれに私にとってはみんな家族にゃ」
「そうだったのですか…」
　ラミィさんは少しうつむき
「外の世界を知りたいって思って家を飛び出してだけど何もかも分からなくて倒れてしまい…ほんとに世間知らずですね私って……」
「そんな事ないにゃ誰だって最初は知らないことだらけにゃ、いろんな経験してちょっとずつできていくものにゃ」
「猫姫ちゃん……そうですね私頑張っていきます」
　その時私は初めてラミィさんの嬉しそうな笑顔を見た
「その意気込みにゃ～♪♪」
　その後は二人で商店街の大通りを歩きつつお互いの話やふぶき屋の事を話した
＊商店街の出入口＊
「まだまだ話したいですけど私のお家があっちなのでここでお別れですね」
「そうにゃねそろそろ帰らないといけない時間にゃ」
「今日は何から何まで本当にありがとうございます」
「ぜんぜん平気にゃこれからは倒れないでにゃね」
「はい、気をつけますあと今度ふぶき屋にお邪魔させてもらっても良いでしょうか？」

「ぜんぜんいいにゃむしろ大歓迎にゃ♪♪いつでも来てくれて構わないにゃ」
「では今度必ずお邪魔させていただきます、あとお礼としてこれを受け取って貰えませんか」
そう言ってラミィさんは上着のポケットから何かを取り出すと私の手の上に置いた
「これはなんにゃ？」
私が受け取った物を見るとそれは白色の花と青色の花が重なりあった綺麗な髪飾りであった
「良いのかにゃこんなきれいにゃ物貰って」
「良いんですこんなお礼しかできませんのでどうぞ受け取ってください」
「大切にするにゃ」
「はい」
二人はお互いに楽しそうに笑いあうとまたあおうと言いあいそれぞれの帰路へと進んだ

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

数日後

＊＊ふぶき屋＊＊

「猫姫ちゃんその髪飾りなーに？」

いつも通り開店の仕度をしているとフブキさんが話しかけてきた
「この髪飾りかにゃ？これはこの前仲良くなった人から貰ったのにゃ♪」
「すごい綺麗な髪飾りだねまるで綺麗な雪中に咲いているお花みたいですごい似合ってよ」
「嬉しいにゃ」
フブキさんに髪飾りの事誉められながら私は開店の仕度をに戻る
ラミィさんにまた会える事を楽しみにしながら今日も楽しく営業を始める
その日は何だか自然と笑みが絶えない日であった

第9話　「白獅と紫龍」

ここはこの世界とは違う異界のお茶屋……
頭上がカタカタ揺れている電車の高架下の飲食街
その一角のうどん屋さん
「美味しいのですここのうどん」
ふぶき屋の店員の一人、ナザは尻尾を揺らしながらかけうどんをすすっていた
「まさかあなたがこの街に引っ越してきた事も衝撃でしたがもうこんな行きつけのお店を見つけていたことも衝撃なのです」
私は自身の隣へと声をかける
隣に座っている少女は私と同じくうどんをすすっていた
「えー私だって怪牙(かいが)がこの町に住んでたなんてびっくりだよ」
「名字で呼ばないでください獅白さん」
ホワイトライオンの少女、獅白ボタンはむ～なっているナザを面白そうに見ていた
獅白さんとの出会いは数時間前にさかのぼります
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

数時間前
この日私は町の郊外を流れる川の土手を歩いていたのです
いや正確に言えば
「ここ…どこ？…」
迷ってしっまったのです
今日はお店も休業日だったのでどこか出かけようと思ってふらふらと歩いていたらここに…
この時のナザは普段の和装メイド服ではなく黒色のＴシャツの上に白色のジャケットとジーパンというの服装であった
「この店主から頂いたスマホさっきから真っ暗になって動きませんし…しかもこの辺り看板もないですしもう最悪なのです」
ポケットから取り出した真っ暗のスマホ画面をポチポチ触りながらがっくりとうなだれていた
「はあ～～……」
これからどうしよう
そんなことを思いながら土手に座りこんでいると
「あれ？怪牙じゃん、どうしたのそんなとこに座りこんで」

背後からかけられた声に私は背筋は氷ついた、なぜなら私はほとんど名字を名乗った事なんてないからである

私は顔後ろへ向ける

「やっぱり怪牙じゃん」

そこには黒いジャージのような服に白よりの灰色の髪をした少女が私の顔を覗いていた

「獅白様?」

私は半信半疑に言った

「お、私のこと覚えていてくれたんだ〜」

「えっほんとに獅白様なのですか?!」

「もちろん獅白ボタンなんて私以外いるわけないじゃん」

「お久しぶりなのです」

私は立ち上がり獅白様に近付いた

「なーにー?すごい不思議そうな顔してるけど私の顔に何か付いてるの?」

「あっいえ、というか不思議そうな顔にもなりますよ!?どうしてあなたがここにいるのですか?」

「え〜私ね〜ここに引っ越して来たんだよ〜」

「引っ越してきたのですか!?」
　えっ引っ越してきた！この人確かギャングタウンに住んでたはず…それで引っ越してきた!?
「なんかすごい目回してるけどだいじょぶか～」
「あっいえ、いきなりだったもので思考が追いつかなくなってしたい」
「まぁ私も怪牙がここにいるのびっくりだったけど、まあ積もる話しも沢山あるだろうし、どっかで食べて話そ～私いい店しってんだ～」
　そうして私は獅白様に連れられて土手を後にしてこうして今に至るのです
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
　こうして高架下の飲食街に着いた私はお互いの近況について話し合った
「も～怪牙がどっか行っちゃってあのあと私大変だったんだから～」
「あのときはあなたもグループを解散させるって言ったからじゃないですか」
「えーそうだったっけ?」
「そうですよ、まったく相変わらずマイペースなんですから」
　獅白様との出会いは数年前、ここからずっと西にある街、ギャングタウンでした。
　今でこそ大分マシになってきている治安も当時は最悪なレベルで街は何十ものグループによって勝手に支配されていて、それを取り締まる行政組織もまったく機能して

ない無法地帯でした。
私がいた獅白様のグループは他の奴らと違い、縄張り内で何かしらの悪さをすることもなく、ただぐうたらとしていて、縄張りに入ってきた他のグループの奴らを追い出す。
そんなことしかしていなかった。
だけどそんなことをしている内に、気づいたら縄張りの商店街の人達から慕われていき、気づいたら敵対していたグループもなくなっていって縄張りが広がっていく。
気づいたら増えているグループのメンバーを横目に、いつも獅白様はつまらなそうな顔をしていた。
そして、気づいたらグループもほとんど無くなり、行政もやっと回復した頃、獅白様は突然グループの解散を宣言した。突然の解散発言に当初はいろいろあったけど、結局は解散し、私もギャングタウンを出て、放浪の旅へと戻ったら。
「それにしても、まさか怪牙が噂で聞くフブキ先輩のやってる店で働いてるなんてね」
「私だって、獅白様が店主と同じところで働くなんてびっくりなのですよ」
「え～そう?」
「そうですよ、どうしてなのです?」
「それいったらなんで怪牙もフブキ先輩のお店で働いてるのよ?」
「……」ウツムク

「はぁー怪牙ってほんと自分のこと語りたがらないよね…」
「……」
「……私がグループ解散させた理由しってる？」
「…いえ…」
「私ね…グループ持って、他の所と抗争して、それで気づいたらなんか自警団みたいな感じになって、でも私、つまらなかったのよね…みんなにリーダーって慕われても何か違たっのよね…なんか私じゃ無くても良かったというかね」
「……」
「でもね、ここに来て私楽しいこと…夢を見つけられたのよね」
「そうだったのですか……」
「さっ！しんみりとした話しはここまで、ほら次の店行くよー」
「えっ！まだいくのですか!?」
「あたりまえじゃんまだ一件目だもんほら行くよー」
獅白は会計を払うとナザの手をつかみ次の店へと連れていった

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

夕焼けの商店街

「いやーおいしかった～」
「まさか三件も行くなんてびっくりなのですよ」
「でも美味しかったでしょ？」
「確かに、美味しかったのです」
「もう夕方だけど今日家に泊まっていく？」
「獅白様の家ですか？」
「うん、怪牙の大好きな大葉もあるよ～♪♪」
「あれですか～…確かに匂いも良いですし、味も良いですけどあれの味を覚えてしまうと、他で替えが聞かなくなってしまいますし……」
「ざーねん」
「それにここまで来たならもう道にも迷いません大丈夫ですよ♪♪」
「なら良かった～怪牙すぐ迷っちゃうから」
「私はあの頃とはちがうのですよ!!」
　私が帰路につこうとした時
「あっそうだ！」
「はい？」
「ししろん」

「えっ？」
「獅白じゃなくて、ししろんって呼んでこれからは」
「いきなりどうしたのですか？」
「だって私たちグループの仲間じゃなくて友達でしょ？」
「友達……」
「だからみんなにもそう呼ばれてるから、ししろんって呼んで」
「…し…ししろん…」
「うん♪♪ちゃんと呼べるじゃん、じゃあ私はなんて呼べばいい？」
「ふえっ！えっと……ナザ…」
「じゃあナザ改めてよろしくね」
「はいなのです♪♪♪ししろん♪♪」
「今度お店行っても良いよね？」
「もちろんなのですよ♪♪」
「楽しみだなーナザのきれいな着物姿♪♪」
「ふぇ!!……／／／」
「何赤くなってるのよ～」
「この～～……私だって、ししろんのアイドル衣装楽しみに待ってるのですよ♪♪」

「はう!!返してくるとは思わなかったんだけど……」

「成長したんですよ♪♪」

商店街の夕焼けが赤々と照すなか、それぞれの帰路に着く二人の少女の影は一度は離れながらも、また一つになるかの如く重なりあっていた。